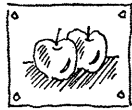


構を示したのであった。そしてノースダコタのニュースタイル、ネブラスカのツソの幼児教育プログラム、あるいはフィラデルフィアの教師たちの学習センター等の例をひいて、米国内でも充分に教育改革の可能なことを主張している。しかしシルバーマンは、六〇年代の教育改革をゼロと評価する一方で、インフォーマル教育を過大評価したり、公家学校の悪い面だけが強調されていたり、あるいは語学教育、教員養成に断片的に英国ふうの教育哲学がみられるという理由で、まだ試行錯誤の雑多なプログラムを一括してモデル化している等、問題点もみられるので、これらを

さし引いて、このすぐれた啓蒙書のみていく必要がある。ただ六〇年代の教育改革が、外部から、上からできあいのプログラムを押しつけたために、現場の教師が離れていき、結果的には改革が不成功に終わったことを充分に自覚した上で、「学習形式の変革」を現場の教師によって力強くおしすすめるべきことを唱えた点は、高く評価されてよいし、この本の出現によって、ますますインフォーマルな教育を公教育の中に深く浸透させた貢献は特記されてよいものである。

(つづく)

児童園芸学



皆川 美恵子

春の三月号に紹介した浅山英一先生の児童園芸学の話は、何か参考になったでしょうか。

先生はよく、こんなことをおっしゃいます。世の中の三分の一の人たちは生まれつ

き植物が好きで、誰に言われなくても自分から種子をまいて植物を育て、楽しんでいゝ。もう三分の一の人たちは、こちらが植物のおもしろさ、美しさを示してあげてはじめて、植物に対する興味をおこし、植物

が好きになる。残りの三分の一の人たちは、いくら話しても興味を示さず、自分で種子をまいてみようとも思わない、この人たちは、「縁なき衆生」でどうしようもないのです。

私はどうやら、まんなかの三分の一に入るようです。浅山先生の話がきっかけとなつて、すっかり植物が好きになつてしまいました。「縁のある衆生」になつたようです。この浅山先生との御縁から、園芸教室に顔を出すようにもなりました。その教室などの話を参考にして、植物についての話を書いてみようと思います。みなさんの生活の中や、仕事の中で、少しでも役立てば幸いです。

ほうせんか

日ざしの強い明るい日、庭や道端には、この花がよく咲いていました。花がおわたあとの実は、ちょっとさわつただけでパツとはじけました。友だちと競争で、熟してはじけそうな実をさわつたものです。

植物は、大地に根をはって、動物にくらべて、動きが目につきません。しか

し、このほうせんかの実のはじける動きは、はつきり目にみえるため、楽しいものです。ほうせんかの英名は、touch-me-not「さわらないでね」と言うそうです。いくらそう言われても、子どもはさわりたいが、まだどんどんさわります。種子はまわりにはじき飛び、ふえていきます。子どもは、子どもも知らぬ間に、どこかに運ばれ、そこで来年芽を出すことでしょう。

小学校では、理科の時間、ほうせんかを茎から切つて、赤インクの中につけます。しばらくして切り口をみると、吸収した水分の上昇路である導管が赤く染まっています。もっと時間がたつと、茎や葉が赤くなつてきます。たくさん水を吸い、蒸散がさかんなほうせんかは、茎から葉に通じている維管束の導管を見るのに、うつつけの材料なのです。

ほうせんかは、幼稚園の庭、小学校の庭

には、ぜひ種子をまいて育てたい植物です。いやそれだけではありません。ぜひ各家庭でも育ててもらいたいです。そして種子が熟したら、その種子をいつも、十粒ほど備えておいてください。ほうせんかの種子には、筋肉をやわらげる成分があります。トゲがささった時など、種子をかんでぬると、ビクリしてかたくなっている筋肉がやわらかくなり、トゲがよくぬけます。鯛の硬い骨がのどにささった場合でも、種子をかんで呑み込めばいいのです。ほうせんかは、ホネヌキの異名があるのです。

インド、マライ、中国南部の熱帯原産のほうせんかは、高温下の方が育ちが順調です。四月に種子をまくよりは、五月、六月、七月の暖かくなつた頃にまき、夏から秋にかけて、花をみる方がよいでしょう。

コスモスと彫刻

コスモスの花が、青く澄みきった秋空の下、涼しい風にそよいでいるのは、何か昔なつかしい、明治・大正時代の風情があります。竹久夢二の描く女性のうしろにでも、優しく咲いているのがお似合いのような花です。

こんなに日本的な感じのする花ですが、この花のふるさととはメキシコです。日本へ伝わったのは、明治九年ということですが。明治新政府は、文化政策の一環として、美術を奨励するため、工部美術学校をつくりました。その時、ヨーロッパの都市のいたるところに建てられ、市民の生活にとけこんでいる、美しく、楽しい芸術的な彫刻・塑造の作品が、日本の新しい都市にもあつたらと考えて、彫刻科を設けることにしました。そして、イタリアのすぐれた彫刻家ラグーザを招き、指導をお願いしました。ラグーザは、油土で原型をつくり、石膏にとる方法や、大理石の彫刻法などを日本

の若い人々に教えました。さて、このラグーザは日本へ来る時、ヨーロッパで広く栽培されていたコスモスを持ってきました。明治九年とは一八七六年ですから、百年前

のことです。ラグーザは、たすぎがけをした健康な日本娘をモデルに「娘の胸像」という作品を残しています。この娘は清原玉女と言ひ、のちラグーザと結婚して、ラグーザ・お玉となった人です。ラグーザは六年間、指導のため日本に滞在し、明治十六年に帰国しました。

日本の彫刻美術は、どうもヨーロッパと異なり、都市の公園の一角や、家並の中に調和しないようです。彫刻よりは、コスモスの花の方が、日本の公園や街角にびっぴりではないでしょうか。野原や公園や土手や小さな庭など、日本国中あちこちで、秋の光で輝いたり、秋風で踊ったり、強い野分でしなだれているコスモスのことを知ったら、ラグーザは何と思うことでしょう。

日本を愛したラグーザは、きっと天国でよるこんでくれるのではないのでしょうか。

かんびょうの花

遠足や運動会では、お弁当が大きな楽しみです。お弁当では何が好きでしょうか？海苔巻が好きだという方もいらっしゃるのではないでしょうか。海苔巻には、よくかんびょうが使われます。そのかんびょうですが、夕顔からとること、どこかで耳にしたことがあるのではないのでしょうか。ですから、昼間の暑さが残る夏の夕方に開き、夜中白く涼しげに咲く、あの庭の夕顔からかんびょうがとれると思われている方もいらっしゃると思います。もしそうだとしたら、ここでその誤解をといて下さい。庭に咲く園芸種の夕顔は、その名が俗称で、本当は夜顔といひます。夜顔は夜中咲き通し、お月様と顔を合わすことから、ム

トン・フラワーとも呼ばれます。また芳香をあたりに漂わせる、花径十二センチメートルの華麗な姿から、夜会草とも呼ばれています。夜顔は、朝顔や、野辺に咲く昼顔と同じヒルガオ科です。そして、植物学から夕顔といわれる本当の夕顔は、かんびょうをとるウリ科の一年生蔓草なのです。ウリ科ですから、キュウリ、スイカ、ヘチマ、ヒョウタンなどの仲間です。夕顔の若い果実は煮て食べます。成熟した果実の果肉が、薄く細長く、ひものようにむかれ、乾燥されて、かんびょうになるのです。もつとよく熟した果実は、皮がヒョウタンの皮のように堅くなります。そのようなものは、中身がくりぬかれ、郷土玩具のお面や、炭取り等に利用されています。

夕顔といえば、『源氏物語』に登場する女性「夕顔」が思ひ浮かびます。京の都の中、庶民的な小さい家が立ち並んだ一角に、一軒、夕顔が、しっかりしない軒端や

板囲いに、おし気もなくからみついで、すがしい花を咲かせていました。そんな家に、ひっそり住んでいた女性が、「夕顔」です。つましく、内気でやさしい、頼り気ない様子の、生霊によってはかなくこの世を去る「夕顔」は、ものにしたより、しなだれる蔓草の花、夕べに咲き、朝に凋むはかない花の名にびつたりの女性です。この夕顔の花が、園芸種の芳香のある優美な夜顔であれば、どれほど美しく思うでしょうが、そうではありません。夜顔は、明治のはじめに日本に入ってきているので、この夕顔は、本当の夕顔、つまり、かんびょうの花なのです。薄幸のヒロイン「夕顔」は、あくまで素朴で、庶民的な生業なまわの中の人ひとのようです。

白く快げに咲いた花を、光源氏が所望します。光源氏の使いの者に、夕顔の家の女むすめ童わらわは、「この扇の上うへにのせて、差し上げて下さいませ。花の蔓は風情がなさそうです

から」と、扇を差し出します。その白い扇には、香が深く薫たきしめてあります。花はまだしも、茎や蔓は、軟毛があつて見栄えがしない、まあ言ってみれば野菜の花です。そのような花を、作者紫式部は、香りを添そえて雅みやびびに扱あつかったのです。まさに、心こころにくい演出しゅつじゆと言いえるのではないでしょう

か。
時代が少し下がり、平安時代は十一世紀後半、奥羽地方の豪族、阿部頼時、そしてその子貞任、宗任が源氏と戦いました。前九年の役といわれる戦いです。その戦いに夕顔が使われました。人間の顔位の大きさはある夕顔の果実を並べ、伏兵と見せかけたのです。同じ平安時代とはいへ、『源氏物語』の世界とはかけ離れた、武士むすこたちの夕顔の利用法といえるでしょう。北上川流域りゆういきのその古戦場は、今でも、「夕顔」として名前をとどめています。